



石川河川公園

自然環境保全・活用マニュアル

～ 希少種保護の留意点 ～

(カヤネズミ、ミゾコウジュ、タコノアシ、カワヂシャなど)



大阪府 富田林土木事務所

石川河川公園自然ゾーン計画・運営プラットフォーム

＜R7（2025）年度 更新版＞

発行 令和 8（2026）年 6 月



目 次

はじめに ～本マニュアルの目的～	1
------------------	---

I 希少種の生息・生育地の管理

◆カヤネズミ	
1. カヤネズミの基礎情報	2
2. 保護草地（オギ草地）の管理	4
3. カヤネズミ生息地の拡大	15
◆ミゾコウジュ	
1. ミゾコウジュの基礎情報	20
2. 生育地の管理	21
3. ミゾコウジュ生育地の拡大	23
◆タコノアシ	
1. タコノアシの基礎情報	28
2. 生育地の管理	29
◆カワヂシャ	
1. カワヂシャの基礎情報	35
2. 生育地の管理	36
◆新しい生育・生息地づくり	37
◆その他の取組み	
1. 神社と連携したオギ草地づくり	40
2. 自動撮影カメラの設置	44
3. 石川の植物見本園の整備（修景池）	45

II 自然ゾーンの管理運営

1. 自然ゾーンの管理目標	46
2. 自然ゾーンの整備概要（整備経過、管理作業スケジュール）	47
3. 管理・整備の課題	51
4. 石川河川公園自然ゾーン計画・運営プラットフォーム	53
5. 多様な主体の参加による管理運営	66
6. 自然共生サイト	69

III 参考資料

1. 自然ゾーン 関連資料	72
●新都市「大阪府営公園におけるネイチャーポジティブの取組」 ／大阪府都市整備部公園課・枚方土木事務所・富田林土木事務所 （公益財団法人都市計画協会 第80巻第1号 2025年12月25日発行）	
●自然共生サイト 認定申請書一式	78
	（別添CDにデータを収録）
2. 自然ゾーン関連活動一覧	79
3. 自然ゾーンの生きものの記録（植物・野鳥・カヤネズミ）	80
4. マニュアル更新記録	94

※マニュアル内の青字表記は、今年度更新での追記・修正箇所

はじめに ～本マニュアルの目的～

本マニュアルは、石川河川公園に生育・生息する希少種※のうち、主にカヤネズミおよびミゾコウジュ、タコノアシ、カワヂシャの保護・保全について、公園管理のありかたや手法、および管理上の留意点などについてまとめたものです。

※大阪府レッドデータブック（「大阪府における保護上重要な野生生物」）記載の動植物

マニュアルの内容は、主に公園の指定管理者の業務を対象として記述していますが、公園を利用するボランティアや一般来園者、また他の公園管理の参考にもなるよう、基本的な管理業務に加えて、将来の方向性の検討や希少種の基礎情報、当年度の取組み、次年度への引き継ぎ事項、様々な関連データなども参考資料として収録しています。

また、毎年、管理や取組みを反映して内容の改定を行うこととしており、この「令和 7 (2025) 年度更新版」は、令和 7 年度の成果を踏まえた最新版として作成しています。（マニュアル初版は平成 29 (2017) 年度で、それ以前の 20 年以上にわたる希少種保護の取組みのデータなどが収録されています。）

マニュアル作成にあたっては、「石川河川公園自然ゾーン計画・運営プラットフォーム」の学識者の方々や専門家、長年にわたって希少種保護活動を実践してきた市民団体、地元住民のみなさんの意見や提案をいただいています。

現在は、カヤネズミとミゾコウジュ、および令和 1 (2019) 年に 17 年ぶりに発見されたタコノアシ、かつてよく見られたカワヂシャを主な対象としてマニュアルを作成していますが、将来的には地域で保護活動に取り組んでいるカワバタモロコ、河川敷に飛来するオオタカやオオヨシキリなど、その他の希少な動植物についてのマニュアルを作成することが望まれます。またこれらの希少種は自然環境の指標種と考えられ、その生育・生息地を維持することは、石川全体の自然環境を保全することにつながっており、今後の公園管理にもそのような広い視野が必要とされます。

最後に、マニュアルの検討にご協力いただきました、大阪府立大学大学院の上甫木昭春名誉教授をはじめ、石川河川公園自然ゾーン計画・運営プラットフォームのみなさまに厚く御礼を申し上げます。

石川河川公園自然ゾーン計画・運営プラットフォーム
コーディネーター 寺川 裕子

I 希少種の生息・生育地の管理

◆カヤネズミ

1. カヤネズミの基礎情報

カヤネズミは、「大阪府レッドリスト 2014」※で「準絶滅危惧種」に指定されており、近年、生息地となる草地環境が激減していることから生息が危ぶまれている。石川河川公園では、主に高水敷に生育しているオギ、セイタカヨシ草地に営巣している。

※平成 12（2000）年に作成された「大阪府における保護上重要な野生生物（大阪府レッドデータブック）」の改訂版

カヤネズミ (*Micromys minutus*) は宮城県以南の本州および四国、九州に生息する日本最小のネズミです。その名のとおり河川敷や人里近くのカヤ原をすみかとし、主にイネ科の種子やバッタ・イナゴなどの昆虫類をエサとして生活しており、カヤ（オギ、ススキ、ヨシなどの大型イネ科植物の総称）の生葉を細く割いて地上 1～2m の高さに野球ボール大の球形の巣を作ります。巣材はその場に生える草本がそのまま巣に編みこまれる形で利用され、鳥のように離れたところから巣材が運び込まれることはありません。巣に利用される植物はイネ科・カヤツリグサ科の草丈の高い植物を中心に 50 種以上確認されています。

カヤネズミの生息するカヤ原は、人間と関わりの深い環境です。中でも、ススキ草地に代表される「乾いた」カヤ原は、本来人間が採草や火入れなどの伝統的管理を行うことで森林に移り変わることなく維持されてきた環境です。しかし、近年そのようなカヤ原は管理放棄や宅地造成により全国的に激減しており、かつて普通に見られた草原性の多くの動植物が絶滅の危機に瀕しています。また、オギ原やヨシ原といった「湿った」カヤ原も様々な動植物のすみかですが、埋め立てなどの影響により近年激減している環境です。

このような「カヤ原」をすみかとするカヤネズミは、行動圏が狭いことや寿命が半年～1 年と短いこと、採餌・育児・休息など生活の全てをカヤ原で行うことなどから、カヤ原の面積や連続性の減少、エサ資源の減少といった生息環境の変化に敏感な生きものです。

公益社団法人 日本自然保護協会「モニタリングサイト 1000 里地調査 調査マニュアル」より

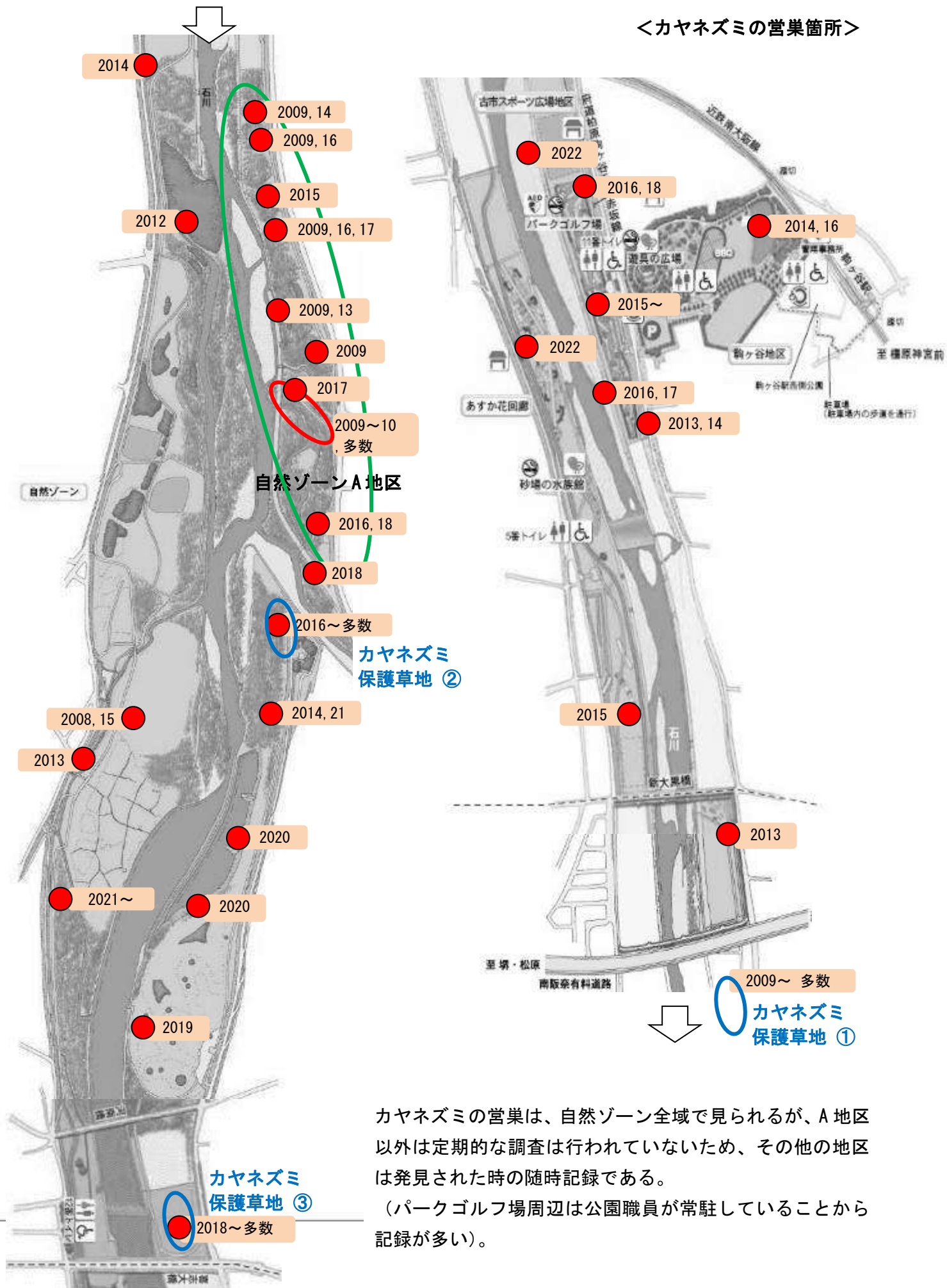


写真：畠佐代子（全国カヤネズミネットワーク）



写真：寺川裕子（石川自然クラブ）

<カヤネズミの営巣箇所>



カヤネズミの営巣は、自然ゾーン全域で見られるが、A地区以外は定期的な調査は行われていないため、その他の地区は発見された時の随時記録である。

(パークゴルフ場周辺は公園職員が常駐していることから記録が多い)。

2. カヤネズミ保護草地（オギ草地）の管理

（１）対象地および基本的な管理スケジュール

<対象地>

保護草地 ① A地区 はびきの大橋 右岸上流

保護草地 ② B地区 梅川合流点 剣先広場

保護草地 ③ B地区 喜志大橋 右岸上流

<基本的な管理作業>

●除草

- ・営巣地（オギ草地）は冬季 12～2 月に全面除草を行う。
- ・5～6 月、10～11 月の営巣最盛期は立入りを控える。
- ・オギ以外の多年草地および観察路は、春～秋に 1～3 回の除草を行い繁茂を抑制する。

●クズ除去

- ・年間を通じてオギ草地に侵入したツルを除去する。
- ・顕著にクズが繁茂している場合は、根茎の掘り取りを行う。

●低茎草地の維持

- ・一年草（エノコログサ等）および移植したチガヤ草地は、侵入した多年草を抜き取る。

●クズ等の踏圧

- ・土園路や柵沿いなどは巡視車で踏圧してクズ等の繁茂を抑える。

●営巣調査

- ・6～7 月および 11～12 月に営巣調査を行う。



<管理スケジュール>

時期	管理内容						オギの状況	カヤネズミの状況
	営巣地	柵以外	柵沿い	低茎草地	観察路	全区域		
4 月	クズ除去		クズ踏圧	多年草抜取	多年草抜取		新芽	
5 月	立入控える	↓ 除草			↓ 除草		伸長	営巣子育て
6 月	↓ 営巣調査	↓ 1 回目			↓ 1 回目			最盛期
7 月		↓ 除草			↓ 除草			
8 月		↓ 2 回目			↓ 2 回目			
9 月		↓ 除草			↓ 除草		出穂	
10 月	立入控える	↓ 3 回目		播種	↓ 3 回目		種子散布	
11 月	↓ 営巣調査							最盛期
12 月	12～2 月の間に全面除草						葉が枯れる	
1 月	クズ根除去		クズ踏圧			全面除草		
2 月	↓							
3 月	立入控える						新芽	

<巣の調査記録>

調査は、初夏（6～7月頃）と秋（11～12月頃）の年2回実施する※。オギ草地の輪郭に沿って歩き、草地の縁から内側2mほどの範囲で巣の探索を行う。巣が見つかったら、巣材に使われていた植物の種類、新鮮な緑色の葉が混じっているか、茶色の葉ばかりか、くずれるなど不完全な状態の巣か、その他気付いたことを調査シートに記入する。

- 調査対象地： A地区（はびきの大橋上流右岸）、B地区（喜志大橋右岸広場、剣先広場）

それ以外にも公園内で巣を発見したときは随時記録

- 調査時期： 年間2回（6～7月頃、11～12月頃）※

- 記録内容： 発見日、場所、巣材の植物、個数、巣の状態（緑／枯／崩）※

※葉が緑色→新鮮な巣／枯草→時間がたった巣／崩れている→古い巣、作りかけの巣

- 調査の際の留意点

- ・カヤネズミの繁殖を妨げないように最大限注意する。
- ・対象草地の輪郭部分のみを探索し、カヤ原の内側に入らない。
- ・巣は絶対にさわらない

※カヤネズミは巣や周辺のように変わると、子どもをかみ殺したり、巣を捨ててしまったりすることがある。

（公益財団法人 日本自然保護協会「モニタリングサイト1000 里地調査 調査マニュアル」より）

※ここ数年は、子育て中の巣への影響をできるだけ抑えるよう、営巣最盛期の6月、11月をさけて7月、12月に調査している。

- 調査記録（R7/2025年）

確認日	場 所		利用した草	緑	枯	崩	計	備考
6/24	駒ヶ谷	パークゴルフ場本流側	オギ	8	2	3	13	
7/10	A地区	はびきの大橋右岸 （保護草地）	オギ	5	10	5	30	上流側の丘 b
			オギ	2	1	4		下流側の丘 a
			オギ		3			丘 f
7/10	B地区	喜志大橋 右岸広場	オギ	1	3	1	5	
7/10	B地区	剣先広場	オギ	2		1	3	新規観察路沿い
12/11	A地区	はびきの大橋右岸 （保護草地）	オギ	1	3		7	上流側の丘 b
			オギ		2	1		下流側の丘 a
12/11	B地区	剣先広場	オギ	1	5	3	18	新規観察路沿い
				2	6	1		円形園路の駐車場側
12/18	B地区	喜志大橋 右岸広場	オギ		1		1	
12/18	駒ヶ谷	パークゴルフ場本流側	オギ			1	1	
			計	22	36	20	78	

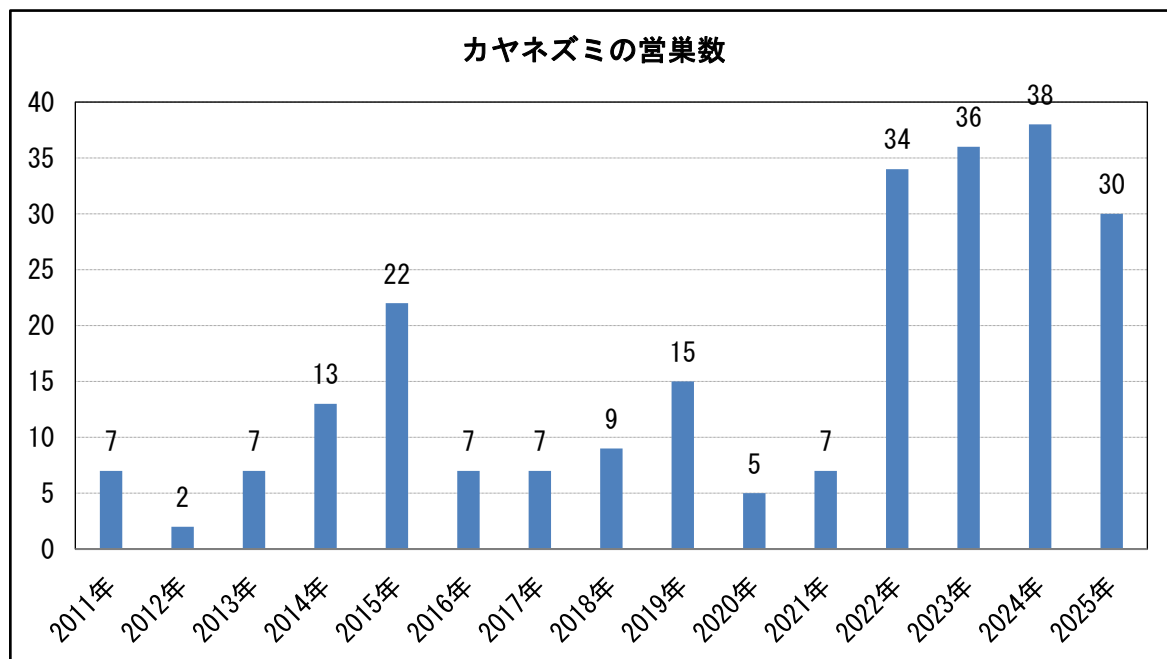
<カヤネズミ営巢の経年変化（2011～）>

- ・調査場所： 自然ゾーン A 地区 はびきの大橋右岸・保護草地 小丘 a、b
- ・巣数は、その年の調査日のうち、同時に確認した巣の数が最大だったときの数値

※確認した巣はマーキングしておらず、同じ巣を別の調査日にダブルカウントしている可能性が大きいため、同時に確認した巣数の最大値を当該年度の代表値とした。

※各年度での調査日および調査回数は一定していない。

年度	巣数	調査日 (営巣数の最大日)
2011 年	7	11 月 12 日
2012 年	2	12 月 1 日
2013 年	7	11 月 10 日
2014 年	13	10 月 23 日
2015 年	22	9 月 10 日
2016 年	7	11 月 10 日
2017 年	7	10 月 12 日
2018 年	9	10 月 12 日
2019 年	15	7 月 4 日
2020 年	5	10 月 15 日
2021 年	7	11 月 15 日
2022 年	34	7 月 14 日
2023 年	36	11 月 9 日
2024 年	38	12 月 12 日
2025 年	30	7 月 10 日



① A地区 はびきの大橋右岸上流

小丘（a, b）の周辺はセイバンモロコシ、ヨモギ、セイタカアワダチソウなどの草地で、本流側にはクズが広い範囲に繁茂している。カヤネズミの営巣に適した環境を保全するため、オギの移植（c, e）や、高茎の多年草を抑制する草刈り（d オギ草地を除く全域）、自生オギの観察（f、巡視車の踏圧によるクズ抑制（g）**低茎草地の創出（h）、日照改善のための観察路整備（I）**などの管理を行っている。



2017 年 11 月ドローン撮影（台風で小丘周囲が冠水した後の現地）

●管理内容

＜カヤネズミ営巣オギ草地＞

- ・ a, b, c 区域（オギ草地 a : 約 200 m²、 b : 約 300 m²、 c : 約 200 m²）
- ・ e 区域（約 30 m² H30/ 2018 年 3 月にオギ根茎を移植）
- ・ f 区域（約 30 m² H30/ 2018 年に約 10 株の自生オギを確認）

既存および移植したオギ群落。クズの侵入防止とカヤネズミ営巣の保護、調査を行う。

5～11 月 : 営巣時期なので区域内に立ち入らない。侵入したクズは周囲から除去する。

6 月、11 月 : 年 2 回（春・秋）の営巣調査を行う。

12～2 月 : 全区域除草後に、地上をはっているクズのツルを除去する。

→ 地上のツルは人力での除去が可能、地中の根は重機で掘り起こす。

＜営巣地周辺の草地＞

- ・ d 区域（オギ草地 a, b, c, e, f 以外 : 約 3000 m²）

5 月～10 月初旬の間に 1～3 回の全面除草を行って、高茎の多年草（セイバンモロコシ、セイトカアワダチソウ、ヨモギなど）の繁茂を抑制する。

→ 1 回目 : 5～6 月、2 回目 : 7～8 月、3 回目 : 9～10 月初旬など、適宜に間隔をあけて草が伸長したところに刈り取る。3 回目は 10 月初旬までに実施する。



- ・ g 区域（イノシシ柵沿い : 約 200 m²）

柵管理のための巡視車の走行で踏圧し、クズの侵入を防止する。

- ・ h 区域（低茎草地の育成 : エノコログサ約 75 m²、チガヤ 30 m²）

R4/ 2022、R5/ 2023、R6/2024 年 3 月に重機耕起して多年草の根茎を除去（25 m²×3）

R6/2024、R7/2025 年 3 月にエノコログサの種子を播種、チガヤ根茎を移植

4～11 月 : 状況を見て必要であれば、多年生草本の抜き取り作業を行う。

- ・ I 区域（観察路 : 約 55 m² R6/2024 年 3 月 日照改善を目的にオギ根茎を除去）

4～11 月 : d 区域と同時に除草、適宜に多年生草本の抜き取り作業を行う。

- ・ 全区域（a～h 含む : 約 4000 m²）

12～2 月 : オギの地上部が枯れる冬期に、全面除草を行う。

→ 3 月に入るとオギの新芽が動きだすため立入を控え、除草は 2 月までに実施する。

<現地のようす（b 区域）>

5～6 月 ： 伸長



10～11 月 ： 出穂



1～2 月 ： 全面除草後



●新規観察路の整備による営巣環境の改善（2025 年度の実施）

1) オギ草地の現状

- ・小丘 b（約 300 m²）は 2011 年の調査開始以来、クズ除去作業の効果もあって良好なオギ草地が形成されており、比較的安定して多くのカヤネズミの営巣が確認されてきた。
- ・2024 年度にも過去最多の 28 個の営巣が見られたが、翌 2025 年度の調査では、周囲の環境や維持管理の方法が前年度と変わっていないにもかかわらず、わずか 4 個に激減した。

＜小丘 b の営巣数＞

	2021/11/15	2022/11/10	2023/11/9	2024/12/12	2025/12/11
営巣確認数	7 個	12 個	17 個	28 個	4 個

2) 営巣減少の原因と改善方法

- ・クズは 5 年以上の除去作業でかなり減っているが、オギ草地の中に多年草（メドハギ、セイタカアワダチソウ）やツル植物（ヤブマメ、ガガイモ、外来アサガオ類）が繁茂し、その部分のオギが衰退している。



オギ草地内に繁茂している多年草やツル植物

- ・オギ草地の中央付近のため人力による除草作業がやりにくく、今のまま放置するとさらに広がる懸念があり、また日照がさえぎられてカヤネズミのエサ植物（低茎草本）の生育も見込めない。
- ・そこで、オギ草地の中央部に観察路（幅 1.5m×35m）をつくり除草作業に入りやすくするとともに、通路内のオギ根茎を掘り取って※日照を入れ、低茎草本の生育を促す。
※自然ゾーンD地区の神社用（茅の輪材料）のオギ移植地の補植に利用
- ・その後は春～秋の園路除草にあわせて刈り取りを行い、観察路の維持を図る。なお昨年に同様の整備を行なったB地区では、新しい観察路沿いに多くの営巣が確認されている。

＜B地区円形草地の営巣数（観察路整備の効果）＞

	2021/11/15	2022/11/10	2023/11/29	2024/12/12	2025/12/11
営巣確認数	0 個	13 個	3 個	0 個	9 個



B地区の観察路



観察路沿いの営巣

●低茎草地の育成による採餌環境の改善（2025 年度の実施計画）

1) 低茎草地試験地の現状

- ・2022 年よりカヤネズミ営巣地の隣接箇所（h）において、多年生草本の根茎の掘り起こしと除草を行い、カヤネズミ採餌地の育成を試みているが、なかなか目指す低茎草地が形成されない。
- ・園路沿いはセイバンモロコシを主とする多年生の高茎草が繁茂しており、隣接する低茎草地試験地やオギ草地に侵入しやすい状況となっている。

2) 播種・移植による環境改善

- ・試験地に、採取した一年草（エノコログサ、アキノエノコログサ、メヒシバ）の種穂を大量（約 500 本）に撒き出し、春の発芽を期待することとした（昨年、一部に撒いたエノコログサは発芽）。



秋に採取した一年草の種子



試験地への播種 2025/10/9

- ・園路沿いには、在来草本でカヤネズミの餌になり、面的に広がって多年草を抑制する効果が期待できるチガヤを移植することとした。
- ・チガヤ根茎は自然ゾーン外（西行うたのみち）の繁茂地で掘り取って採取した（14 m²）。移植の際は、多年草の根茎を含む表土を除去して植え付けた（30 m²）。



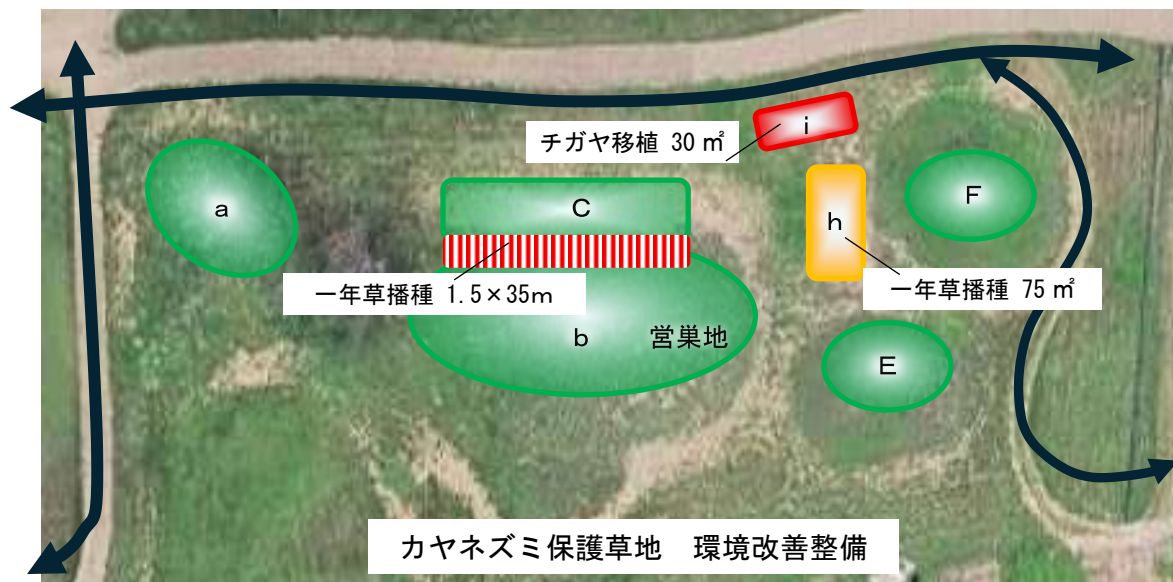
チガヤ根茎の採取地



掘り取ったチガヤ根茎 2026/3/10



チガヤの新芽 2026/4/9



② B地区 梅川合流点 剣先広場

本流に梅川が合流する剣先部の広場と梅川側斜面のオギ群落で、2020 年以降、カヤネズミの保護草地としての管理を行っている。

- ・円形草地 a（約 500 m²）

2m園路に囲まれた円形草地で中央付近にチガヤ群落（衰退傾向）がある。

- ・斜面草地 b（約 750 m²）

斜面上部は 2m、下部は 3m園路に区切られ、全体的にオギが密生している。

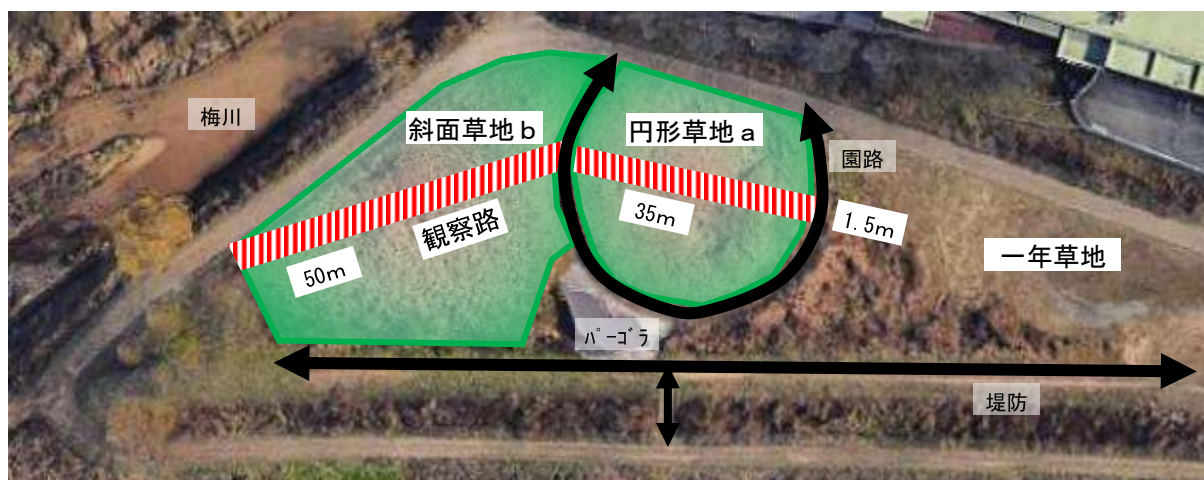
- ・観察路（幅 1.5m×85m 約 120 m²）

2024 年度に営巣が見られず、オギの繁茂を抑えて日照を入れるための観察路を整備したところ、2025 年は多くの営巣が確認された。

調査年次	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年	2025 年
6～9 月	0	0	0	0	0	3
10～2 月	8	4	20	7	0	18
計	8 個	4 個	20 個	7 個	0 個	21 個

●管理内容

- ・5～11 月：営巣時期なので区域内に立ち入らない。侵入したクズは周囲から除去する。
- ・6～7 月、11～12 月：年 2 回（春・秋）の営巣調査を行う。
- ・12～2 月：オギの地上部が枯れる冬期に、全面除草を行う。
→ 3 月に入るとオギの新芽が動きだすため立入を控え、除草は 2 月までに実施する。
- ・観察路：春秋の営巣調査前に除草を行ってオギの侵入を抑え、日照の入る空間を維持する。



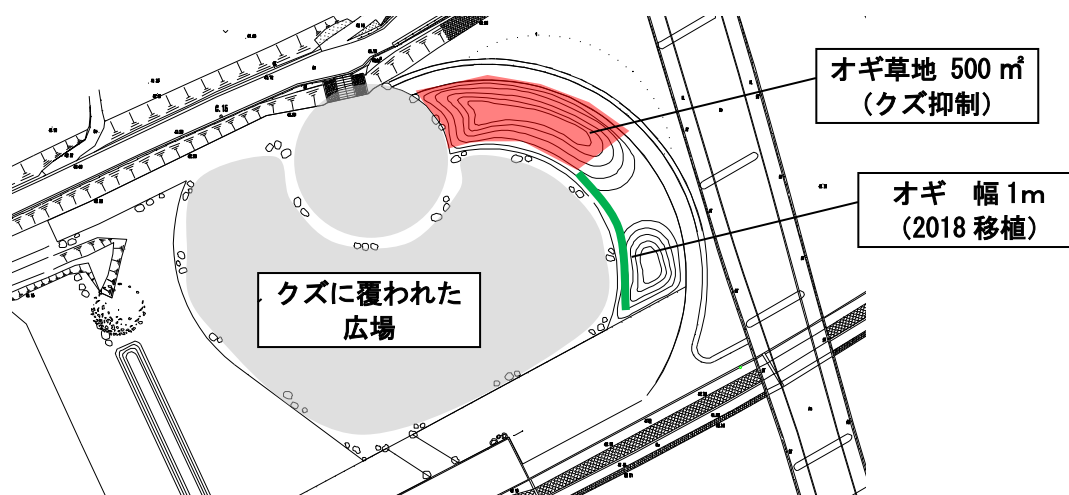
③ B地区 喜志大橋右岸

B地区（喜志大橋右岸）のオギ草地は2011年の広場整備時に移植して定着したもので、2018年にカヤネズミの営巣を確認した。隣接する広場からのクズ侵入が顕著だったため、2024年1～2月にクズ根茎の重機掘り起こしを行い、2025年は人力で伸長したクズのツル除去を行ったところ、営巣数の増加が見られた。

調査年次	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
6～9月	5	0	0	3	0	0	0	5
10～2月	7	3	7	1	1	1	3	1
計	12個	3個	7個	4個	1個	1個	3個	6個

●管理内容

- ・5～11月：営巣時期なので区域内に立ち入らない。侵入したクズは周囲から除去する。
- ・6～7月、11～12月：年2回（春・秋）の営巣調査を行う。
- ・12～2月：オギの地上部が枯れる冬期に、全面除草を行う。
→ 3月に入るとオギの新芽が動きだすため立入を控え、除草は2月までに実施する。
- ・年間を通じて侵入したクズのツル除去と、侵入が顕著な場合は重機掘り起こしを行う。



(3) 今年度の取組み (R7/2025 年度)

	実施日		内 容	場 所	h	m ²	人	巣数	備考
1	2025 (R7)	5/8	クズ除去	A 保護草地	2.0	-	8	-	石川自然クラブ
	"	6/24	営巣調査	パ-ゴルフ場本流側	1.0	-	1	13	
3	"	7/10	営巣調査、オオブタクサ除草	A 保護草地、B 剣先、右岸	2.0	-	7	38	石川自然クラブ
	"	7/10	営巣調査、新規観察路の除草	B 剣先	4.0	130	2	-	観察路は刈払機除草
		9/19	機械除草	A 保護草地	-	4000	-	-	全面除草 (アカシア緑化)
4	"	10/9	クズ・雑草除去、エノコログサ播種	A 保護草地	2.0	-	5	-	石川自然クラブ
	"	12/11	営巣調査、アレチウリ除草	A 保護草地、B 剣先	2.0	-	7	7	石川自然クラブ
	"	12/18	営巣調査	B 右岸、パ-ゴルフ場本流側	2.0	-	1	1	
	2026 (R8)	1/23	機械除草	B 剣先、右岸	-		-	-	全面除草 (アカシア緑化)
	"	1/28	機械除草	A 保護草地	-	4000	-	-	全面除草 (アカシア緑化)
6	"	2/12	クズの根株マーキング	保護草地 a、b	2.0	-	5	-	石川自然クラブ
7	"	3/10	チガヤ移植、観察路整備、クズ除去	A 保護草地	7.0	3000	-	-	(アカシア緑化)
2025 年度まとめ		・ a 丘： 営巣は 7 月 7 個、12 月 3 個確認。クズ根茎マーキングは約 20～30 ヶ所で、昨年と同じくらい。 ・ b 丘、C 移植地： 営巣は 7 月 20 個あったが、12 月 4 個で激減、多年草繁茂と夏の高気温が影響？ → 3 月に新しく観察路を整備。 クズ根茎マーキングは数ヶ所のみで、ツルの侵入も比較的少ない。 ・ d 区域（オギ草地以外）： 夏季 9 月と冬期 1 月（全面）の機械除草を実施。 ・ e 丘： 今年度は営巣確認できず。メドハギなどの繁茂でオギは衰退ぎみ。 ・ f 丘： 営巣は 7 月 3 個確認、12 月はゼロ。 ・ h 低茎草地： 一年草（エノコログサ、アキノコログサ、ヒシバ）の種穂を大量播種。園路沿いにチガヤ根茎を移植。 ・ B 地区剣先広場（円形草地および周囲のオギ草地）： 7 月 3 個、12 月 18 個確認。昨年度の観察路整備の効果と考えられる。 ・ B 地区喜志大橋右岸広場： 営巣は 7 月 5 個確認、12 月 1 個確認。昨年度のクズ重機掘り取りの効果と考えられる。							



5/8 クズ除去 (A 地区)



7/10 観察路の除草 (剣先広場)



10/9 一年草の播種 (A 地区)



12/9 営巣調査 (A 地区)

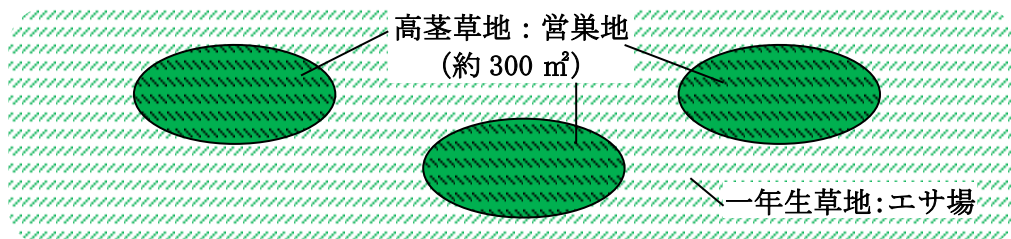


3/10 チガヤ根茎の移植 (A 地区)

3. カヤネズミ生息地の拡大

●新しい営巣地づくり

カヤネズミの営巣に必要な高茎草地（オギ、ススキ、セイタカヨシ等）のオギ群落は、およそ 300 m²ほどが原単位と考えられる。また営巣草地の周辺には、一年をつうじて草の種子やバッタなどのエサをとれる低茎草地（エノコログサなど）も必要で、生息地を拡大するには、高茎草地と低茎草地がパッチ状に配置されていることが望ましい。



自然ゾーンA地区での過去のカヤネズミ営巣地や、ほかに営巣がみられる既存のオギ群落を対象に、優先的に管理する箇所を順次選定する。

- Step 1 A地区の過去の営巣地、その他の地区で現在営巣がみられる箇所の選定
- Step 2 現況の課題の確認（クズや他の多年草の侵入、周囲の植生、機械除草の管理状況など）
- Step 3 状況に応じた、侵入クズの除去（夏季：伸長ツル、冬期：根茎掘り取り）、および周囲の多年草の除去（根茎の掘り取り、抜き取り、定期除草）による低茎草地の創出
- Step 4 継続的なカヤネズミの営巣調査

●オギの移植1（根茎の播き出し）

広い面積にオギを移植するには、耕起した移植地にオギの根茎を撒き出す方法がある。人力での植え付けは小面積を前提としているため、その後の管理（クズ取り、他草本の除草など）を手厚く行うことで定着率が向上すると考えられるが、大面積に撒き出した場合は、翌年以降の管理（除草、クズ除去等）について検討しておく必要がある（管理が行き届かないと、他草本の被圧やクズの侵入で生育しない可能性がある）。

・移植時期：1～2月

・移植方法

- 1) 移植地は、除草とクズや他草本の根をとりのぞいて耕起する。
- 2) 採取したオギ根茎を適当な大きさにほぐす。
(10～20 cm程度)
- 3) 耕起した移植地にオギ根茎を均等に撒き出す
(3本/m²程度)。
- 4) オギ根茎の上に耕起した土をうすくかぶせる。



(地上に出たままでも発芽するが、土で乾燥防止した方が発芽率が良いと考えられる。)

・モニタリング

翌年の春～夏に、移植したオギの発芽・生育状況を確認する。

必要であれば除草やクズ除去を行う。

●オギの移植2（根茎の植え付け）

移植は、オギの地上部が枯れて地下茎が休眠している 1～2 月に行う。移植地の耕起やオギ根茎の掘取りは、人力作業がたいへんなため重機を使用する方がよい。人力でもしやすい植え付け作業はボランティアの協力で実施してもよい。

1) 移植地の準備

- ・除草を行い、セイバンモロコシなど他の雑草の根茎をできるだけとりのぞく。
- ・根茎を植えやすいよう軽く耕起しておく。
- ・移植区域の明示
春～夏に草が繁茂すると移植した場所がわからなくなるため、テープや杭などで印をつける。

2) オギ根茎の掘り取り

- ・採取場所
カヤネズミの営巣が見られない箇所
ある程度まとまった面積のオギ群落
- ・重機で面的に株ごと掘り起こし、いくつかに分けておく
- ・植え付けまで2日以上の間があるときは乾燥や凍結しないよう現地に仮植えしておく。

3) 植え付け

- ・株を1～2本にほぐし、草が繁茂した時にわかるよう赤テープなどで印をつける。
(株がほぐせない場合は固まりのままでもよい)
- ・根が土中に埋まるように植える。
- ・植える際に他の草の根があれば取り除く。

4) 春～秋の除草

- ・オギ以外の多年草※を除草する。
(※クズ、セイバンモロコシ、オオブタクサ等)

※オギとセイバンモロコシの見分け

4～6月 茎の毛の有無

オギ：有り、セイバンモロコシ：無し

7～8月 穂の有無

オギ：まだ穂は出ない

セイバンモロコシ：穂が出ている

9～10月 穂の形状

オギ：ススキに似た穂

セイバンモロコシ：オギ、ススキと異なる



●オギ草地のクズ根茎除去

オギ草地にクズが侵入すると、オギの生育が妨げられて営巣に適さない環境になってしまう。成長したクズの根茎は人力では除去が困難なため、重機を使って掘り起こして根絶する。

1) 全面除草

- ・オギの地上部が枯れている冬期に全面除草を行い、刈り取った草は集草して地表を這うクズのつるがよく見えるようにする。

2) クズの株にマーキング

- ・地表を這うクズのつるを探して株元までたどり、掘り起こす箇所に目印をつける。(この作業はボランティアの人力で可能)

3) 重機による掘り取り

- ・マーキングした箇所を目安に、重機でクズの根茎を掘り取る。
(クズの根茎の深さはおよそ 50 cmほど)



●観察路整備によるオギ草地の環境改善

オギが成長しすぎて密に繁茂し日照がさえぎられると、エサ植物（一年草）が少なくなることなどが原因で営巣の減少が見られる。その際の対応として、オギ草地の中に通路（観察路 1～1.5m）をつくって日照を入れ一年草の生育を促して環境改善を図る。

新しくつくる通路の箇所は、オギ根茎を掘り取り（根茎は移植に利用）、春～秋の園路除草などにあわせて年 2～3 回の除草を行って明るい一年草地の空間として維持する。



< 畠先生のアドバイス 2025/1/15 >

- ・オギが成長しすぎてエサ植物が少なくなっている可能性がある。
- ・桂川でも、オギ根茎の移植から年数が経つにつれて、オギの草丈が高くなり、セイタカアワダチソウや灌木類なども入り込んでくるにつれ、営巣数が目に見えて減ってきた。
- ・桂川では、マンパワー的に保護区の全面刈りが難しいので、代替え方法として春の営巣シーズンに入る直前までにオギ原の一部を刈って、幅 1～1.5m くらいの観察路を一定間隔でつくっている。
- ・観察路を作ると、通路に光があたって一年生草本が生え、その観察路を境界としてオギ原に群落の縁ができるので、そこにカヤネズミが巣を作る。
- ・ただ、根茎の一部を採取するだけでは密生したオギ原自体の改善にはあまりつながらないので、可能であれば一部でも刈り取りを入れる方がよい。

I 希少種の生息・生育地の管理

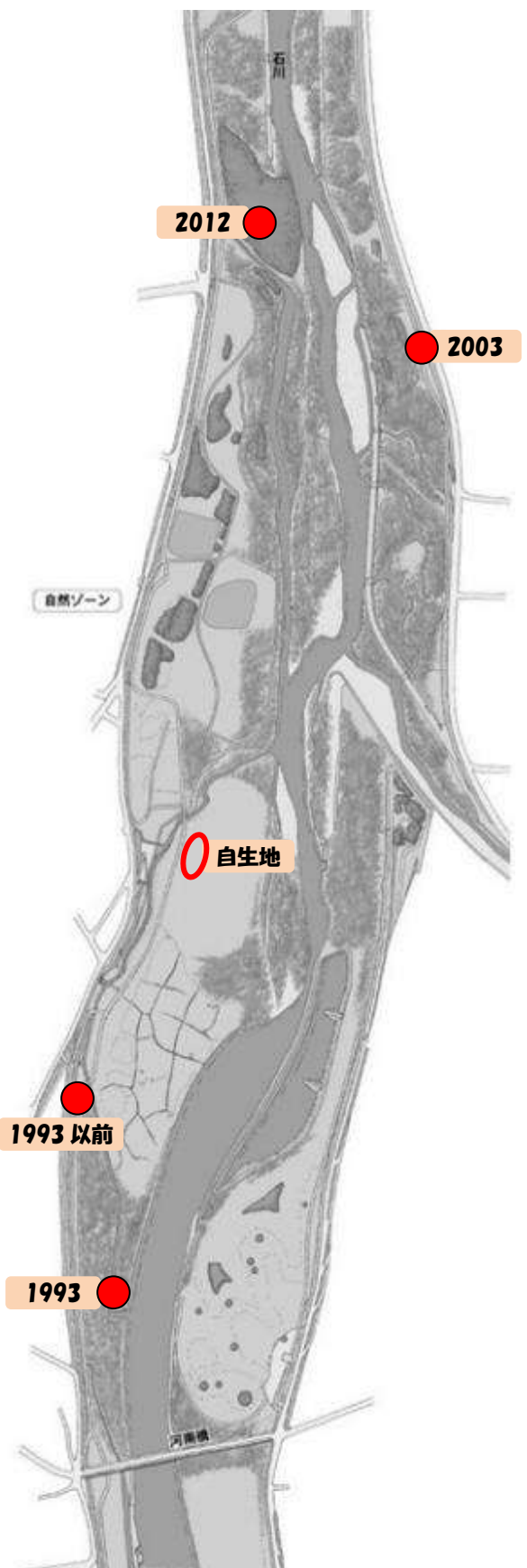
◆ミゾコウジュ

1. ミゾコウジュの基礎情報

ミゾコウジュは、湿った草地や畦、河川敷などの日当たりのよい湿った場所に生育する越年草で、茎は四角形で直立し、高さ 30～70cm になる。葉の縁は鈍い鋸歯があり、葉の表面には細かいしわがあり、細毛が生えている。花穂は長く伸びて 8～10cm となり、5～6 月に淡紫色で長さ 4～5mm の花を咲かせる。日本では、本州（茨城県以西）、四国、九州、沖縄に自生し「大阪府レッドリスト 2014」および「環境省レッドリスト」で、ともに「準絶滅危惧種」に指定されている。



現在、大阪府の南河内地区でミゾコウジュの群落が見られるのは駒ヶ谷地区の修景池と、自然ゾーン D 地区の自生地、および 2020 年 12 月にみつかった富田林市中野町のみである。自然ゾーンで 1993 年頃に群落が見られた箇所は現在は消失しており、それ以外は数ヶ所で過去に一回～数回の生育が確認された箇所である。



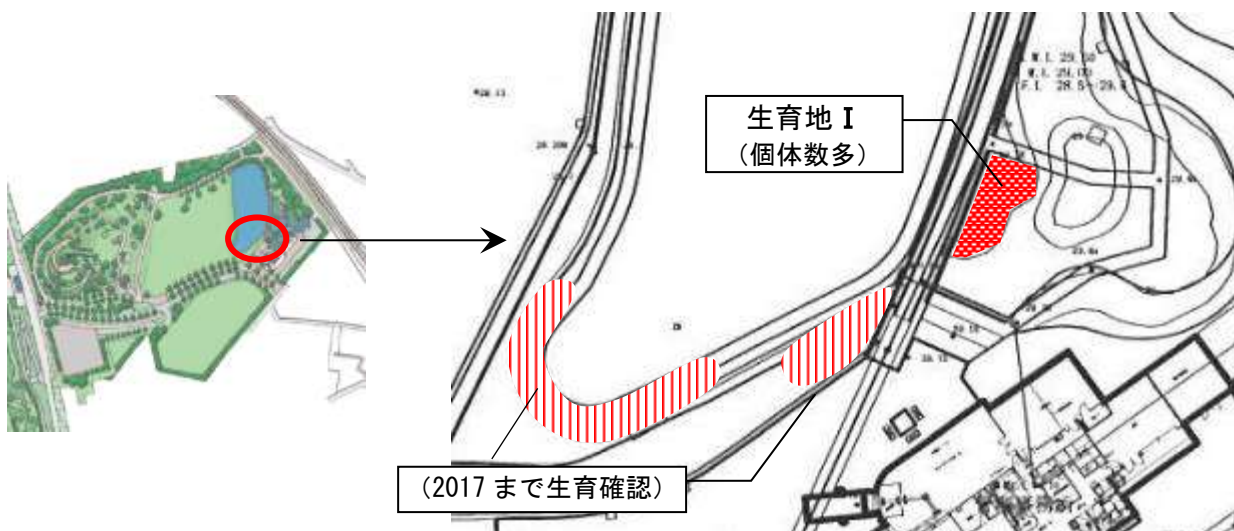
2. ミゾコウジュ生育地の管理

(1) 生育地の概要と管理内容

●管理区域

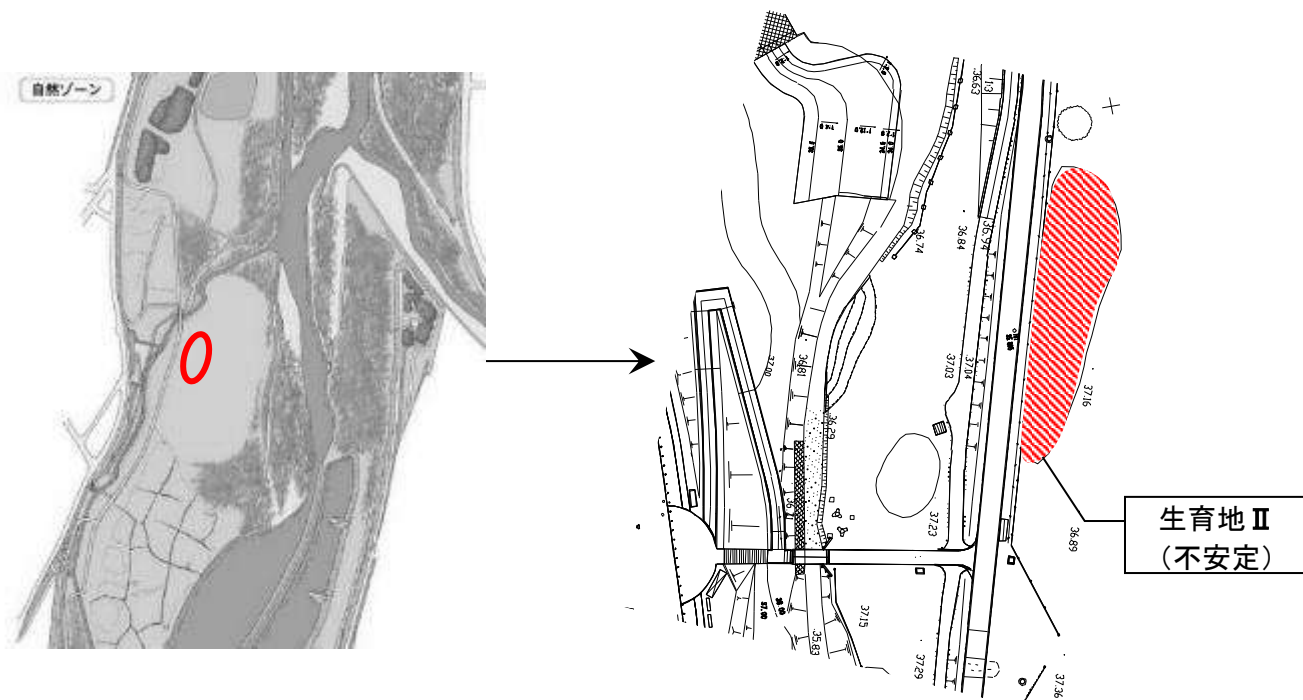
① 駒ヶ谷地区 修景池（生育地Ⅰ）

管理事務所横の修景池の水辺にミゾコウジュの群落がある。自然植生か人為的にもちこまれたか由来は不明で、H23（2011）年に生育が確認された。毎年安定して生育が確認できるのは小さい修景池の一角（約2m×5m）で、5月末～6月初めに開花が見られる。



② 自然ゾーンD地区 自生地（生育地Ⅱ）

開園以前から確認されているミゾコウジュ自生地（約30m×7mの窪地）で、H12（2000）年からボランティアによる管理が継続されている。当初は50～100本の花穂が見られたが、石川の増水による攪乱がないため乾燥化や他の草本の侵入がすすみ、開花が見られない年もあるなど不安定な状態である。2018年から重機による除草や攪乱を実施し、多数が開花するなど効果が出ている。



●管理内容

① 修景池（生育地Ⅰ）の管理

4～6月： 選択除草

ロゼットから伸長して開花するまでの期間は、周囲の雑草を手作業で取り除く（刈り取り、引き抜き）。その際、ミゾコウジュの茎葉を傷めないよう注意する。

5～6月： 開花確認、播種

花穂数を確認し、種子を採取してプランター※や生育地周辺に播種する。

（※現在の生育地、自生地で絶滅した場合などに備えて系統保存する。）

系統保存：対象種の多様性を保存するために一定範囲（地域、流域など）の個体を繁殖させておく。

7～10月： 選択除草

生育地内の個体から散布された種子が新しく発芽・伸長する期間は、周囲の雑草を手作業で取り除く（刈り取り、引き抜き）。その際、ミゾコウジュの茎葉を傷めないよう注意する。

11～2月： 機械除草OK

地面にはりついた冬越しロゼットの期間は、上部を機械除草してもよい。

・サイン設置：生育地の周辺に、ミゾコウジュの紹介や立ち入り制限について周知するサインや、必要に応じてロープ等を設置する。

・生育地Ⅰは、H30（2018）年2月に雑草除去のための耕起・整地、ミゾコウジュ株の植え戻しを行い、またR5（2023）年2月に一部を掘り下げて以降、人力での除草管理を継続している。



<管理スケジュール>

時期	管理内容		ミゾコウジュの状況
	修景池（生育地Ⅰ）	自生地（生育地Ⅱ）	
4月上旬	選択除草	生育確認、選択除草	茎が伸長
中旬	↓	↓	↓
下旬	↓	↓	花穂がのびる
5月上旬	↓	↓	↓
中旬	開花確認（花穂数）	開花確認（花穂数）	開花
下旬	↓	↓	↓
6月上旬	種採取、播種	攪乱（除草、耕起）	結実、種散布
中旬	↓	↓	↓
下旬	選択除草	選択除草	発芽
7月	↓	↓	枯れる
8月	↓	↓	↓
9月	↓	↓	伸長・展開
10月	↓	↓	↓
11月	上部の機械除草OK	上部の機械除草OK	ロゼット冬越し
12月	↓	↓	↓
1月	↓	↓	↓
2月	↓	↓	↓
3月	ロゼット確認	ロゼット確認 攪乱（除草、耕起）	立ち上がり

② 自然ゾーンD地区 自生地（生育地Ⅱ）の管理

4～6月 ミゾコウジュの生育確認

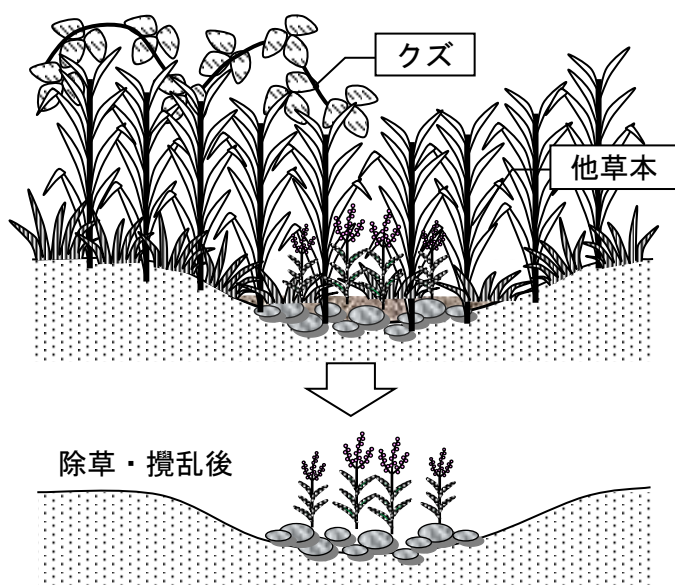
- ・生育個体をさがす。
オギ群落の中でもみつかるので注意。
- ・生育箇所を明示する。
草刈り等の作業で損傷しないように
- ・個体数もしくは花穂数をかぞえる。

6月、3月 攪乱作業

- ・クワやスコップなどで、地表に残った草の根などをとりのぞく。
- ・地中の石ころが露出するまで掘り起こす。

4～5月、7～10月 選択除草

- ・ミゾコウジュ以外の草本を刈り取る。
可能であれば根株から抜き取る。
クズはできるだけツルの根元から除去
- ・除去した草は、生育地の外へ持ち出す。



秋～翌年春 ロゼット確認

- ・本数が少ない場合は、石で囲むなど、翌年に生育箇所がわかるようにしておく。
- ・現在の個体は枯れるが、種子が周辺に播かれて発芽する可能性が高い。

※1～2年、生育が見られなくても、環境条件が整えば埋土種子から発芽することがあるため、人工的な播種はできるだけひかえる。



(2) 今年度の取組み (R7/2025 年度)

	実施日		内 容	場 所	h	m ²	人	株数	備 考
2	2025 (R7)	6/1	開花状況の確認、除草	駒ヶ谷修景池	1.0	10	15	多数	羽曳野市緑の少年団
3	"	6/5	除草・かく乱	D 地区自生地	1.0	10	5	多数	石川自然クラブ
4	"	11/13	除草・かく乱	D 地区自生地	1.0	10	7	なし	石川自然クラブ
5	"	12/17, 18	修景池の整備(石敷き、植栽)	駒ヶ谷修景池	1.0	10	4	-	
2025 年度まとめ		D地区自生地 ・6月には、約20株80穂の開花を確認。 ・しかし11月には冬季のロゼットがみつからず、夏の猛暑の高温と水分不足が原因と考えられた。 ・埋土種子の発芽を期待して、播種等は行わずに来年まで経過観察することとした。 駒ヶ谷修景池 ・羽曳野市緑の少年団の活動で自生地の除草を行った。生育本数が少なかったためプランターのミゾコウジュから種子を採取して播種した。 ・ミゾコウジュとタコノアシが定着している修景池を整備し、その他の希少種など（アマナ、ツルボ、ネジバナ、カワラナデシコ）を移植した。							



6/1 除草・播種：修景池



6/5 かく乱：自生地



11/14 除草・かく乱：自生地



12/17、18 修景池の整備



3. ミゾコウジュ生育地の拡大

(1) 現在の自生地（生育地Ⅱ※）の環境改善

自生地の管理作業は長年ボランティアによって実施してきたが、現地の環境変化により、ミゾコウジュの生育適地としての環境を維持するための労力が増加している。一方で、ボランティアの参加人数は減少しており作業負担が大きい。

そのため今後の環境改善の手法としては、以下のような重機整備と並行して、ボランティアによる維持管理作業を毎年継続することが考えられる。ただし、環境を激変させるとミゾコウジュの生育に影響があることも考えられるため、環境改善の効果やミゾコウジュの生育状況を見極めながら管理することが必要である。

- 1) 重機を入れた本格的な攪乱作業（オギ、クズ、外来草本等の根茎除去）
- 2) 基盤切り下げによる水分条件の改善
- 3) ミゾコウジュの埋土種子を含む表土の保全と整備後の播き出し
- 4) 環境改善効果の確認、および周囲からの多年草やクズの侵入防止※

※自生地の周囲 2m程度の重機かく乱（除草、耕起、根茎除去）や管理用通路の整備など

(2) 重機による攪乱作業

H30/2018 年、R1/2019 年に実施した重機による攪乱は、以下のような手順で作業を行った。

- 1) 事前に草刈りを行い、対象地の範囲を確認する。
- 2) 自生地を踏み固めないよう外側から重機のアームをのぼし、表土をオギの根のある深さ（約 10～20 cm）まで掘り起こす。
- 3) 掘り起こした箇所のオギの根を手作業で取り除き、埋土種子を含む表土を残す。
- 4) 必要であれば、掘り起こしたオギは、カヤネズミ保護草地に運んで移植用に活用する。
- 5) 作業後のモニタリング

重機で掘り起こした箇所は次の春～夏に発芽しない可能性もあるが、その後に埋土種子の発芽を期待できるため、継続的なモニタリングを行う。

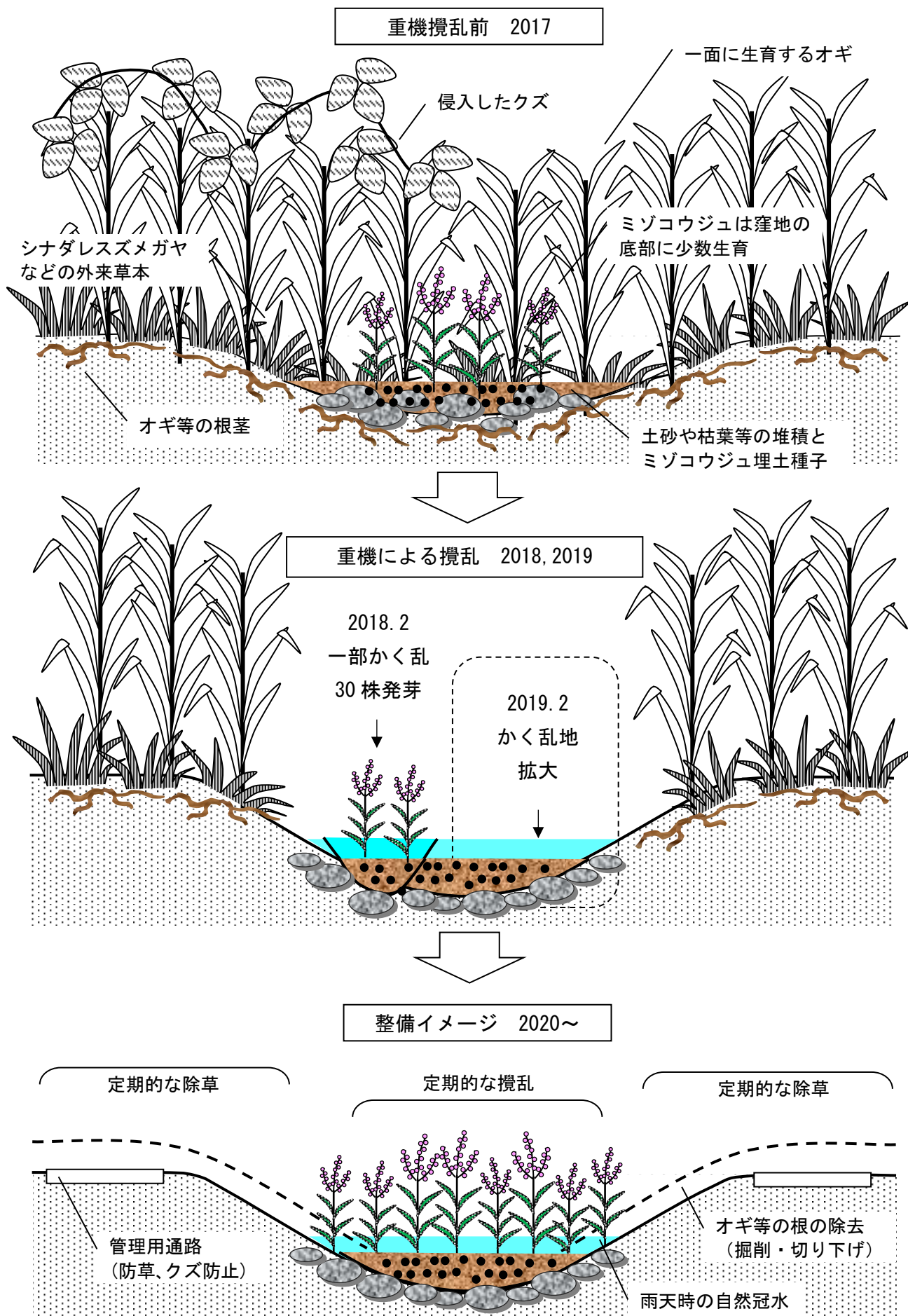
<その後の経過>

- ・ H30 / 2018 年 2 月 : 一部を重機攪乱
- ・ H30 / 2018 年 11 月 : 発芽した苗を約 30 本確認
- ・ R1 / 2019 年 2 月 : 残りの区域を攪乱
- ・ R1 / 2019～R2 / 2020 年 : 多数の株が生育
- ・ R3 / 2021 年 12 月 : ロゼット 16 株
- ・ R4 / 2022 年 6 月 : 開花 2 株
- ・ R4 / 2022 年 11 月 : 多数のロゼットが生育
- ・ R5 / 2023 年 1 月 : 生育地の周囲を重機攪乱
- ・ R6 / 2024 年 2 月 : 生育地の周囲を重機攪乱
- ・ R7 / 2025 年 11 月 : ロゼット確認できず（猛暑の影響？）
次年度の埋土種子発芽を期待



R4/2023 年 1 月の攪乱後

●自生地（生育地Ⅱ）の整備イメージ



(3) プランター播種

現在の生育地、自生地で絶滅した場合などに備えてプランターで播種・育成し、ミゾコウジュの系統保存※を行う。

※対象種の多様性を保存するために、一定範囲（地域、流域など）の個体を繁殖させておく。

5月下旬～6月

1) ミゾコウジュの花穂から種を採取

- ・花穂が茶色くなった頃に種を採取する
- ・種子は、直径 0.5mm と非常に細かいためナイロン袋でうけながら、花穂をしごくようにする。

※種子が未熟な場合は発芽しないので、開花している時期には採取しない。



2) 種を土に混ぜてプランターに播く

- ・普通の園芸土でよい。
- ・土に混ぜれば特に覆土は必要ない。
- ・灌水するときは、種子が流れてしまわないよう静かに行う。



3) 約1週間後に発芽

- ・約1ヶ月後、混みすぎる場合は、間引いて植え替える。
- ・夏期は乾燥しすぎないように注意



※一度、播種すると、同じプランターで毎年発芽・生育・開花・自然播種を繰り返す。

※採取した種子は、石川流域以外では播種しない（地域個体の交雑を避けるため）



I 希少種の生息・生育地の管理

◆タコノアシ

1. タコノアシの基礎情報

R1(2019)年12月の調査で、もとワンド内の水路沿いに「タコノアシ(タコノアシ科)」の群落が大阪府立大学藤原教授により発見された。タコノアシは、環境省および大阪府のレッドデータブックに「準絶滅危惧種」として掲載されている希少種で、旧レッドデータ(2000)のガイドブックの分布地域の南部(南河内・泉北・泉南)には記載がない。

石川河川公園では、H15(2003)年の植生調査の際に A 地区の造成水路で 2 ヶ所確認されているが、それ以外の記録はない。大阪市自然史博物館に採取した個体を持ち込んでヒアリングしたところ、大阪南部の標本としては 1949 年の岸和田市と 2003 年の石川のみで、近年までの多くの標本は淀川流域のものであった。

再発見された生育地は、もとワンド内の小水路の水際から少しはなれた半湿地で、名前の由来となる特徴的な花のあとが、湿地だけでなく水路の対岸にも広範囲に点在しているのが確認された。今後、継続して生育地の状況を観察し、管理方法について検討していく必要がある。

赤く色づいたタコノアシ(2020/11/15)



再発見されたタコノアシ(2020/3/5): 冬枯れの状況



2003 年のタコノアシ標本(大阪市自然史博物館)

「タコノアシ」の概要

(京都府レッドデータブックより)

- ・河川敷や湿地にはえる多年草。
- ・茎は直立し高さ 30～70cm。葉は互生、無毛で縁に鋸歯がある。花序の枝ははじめ渦巻き状で、花期(8～10 月)には数本立ち上がって四方に開く。秋には赤く色づき、タコの足を思わせる。
- ・氾濫や攪乱に依存する植物で、近年産地、個体数ともに少なくなっている。
- ・分布: 本州、四国、九州、朝鮮半島、中国大陆。
- ・土中に埋もれていた種子から発芽することが多く、いままで姿を見せなかった河川敷や湿地に急に群生することがある。

2. タコノアシ生育地の管理

(1) 生育地の概要と管理内容

●管理区域

① 自然ゾーンB地区 自生地

●ワンド湿地（生育地Ⅰ-1）

1994～5年に人工的に整備したワンド（池）が陸化して水路が中央にでき、その水路沿いの数か所の湿地がタコノアシの自生地となっている。湿地にはミゾソバやゴキヅル（兵庫県、奈良県では準絶滅危惧種）が見られるほか、外来種のセイタカアワダチソウも多く見られる。

●二ツ池（生育地Ⅰ-2）

河川敷に自然にできた二つの小池（伏流水の滲出？）で、下流側の池の水辺に、タコノアシが生育している（2023/R5年5月初認、約10株）。同所にはカワヂシャも多くみられる。

② 駒ヶ谷地区修景池 移植地（生育地Ⅱ）

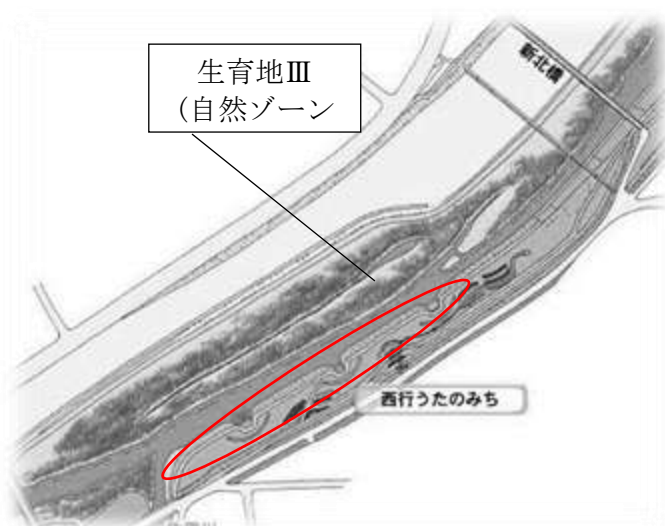
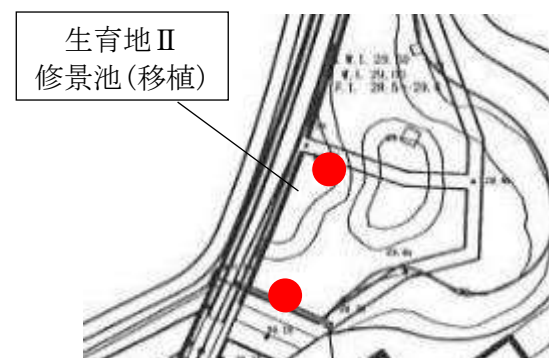
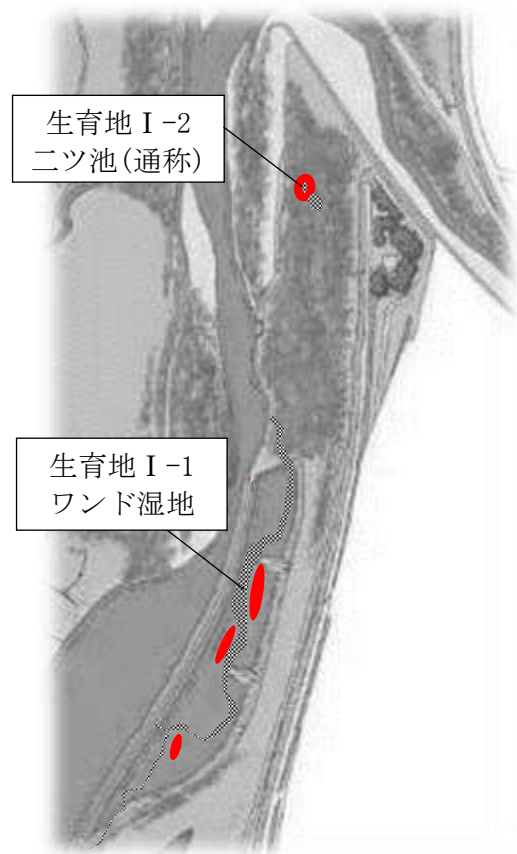
2020年5月に自生地から1株を移植、8月に実生苗約60株を植え付けた（大阪府大藤原教授が播種・育苗したものを譲りうけた）。

- ・修景池の2ヶ所に約10株ずつ
- ・プランター3基を水中に設置（約40株）→ 消失
- ・移植苗→ 2022、23年と5～10株程度が開花結実

③ 西行うたのみち 低水護岸下（生育地Ⅲ）

2022年12月に、自然ゾーン上流右岸の低水護岸下の河原に、約10箇所の群落を確認した。周辺では数年前に河床掘削が行われており、その際のかく乱で埋土種子などが発芽した可能性がある。

自然ゾーン外のエリアだが、自然ゾーンへの種子供給の可能性もあるため、今後の生育状況を継続確認したい。



●管理内容

① 自然ゾーンB地区 自生地管理（生育地Ⅰ-1、Ⅰ-2）

ワンド湿地および小池の水辺（二ツ池）はデリケートな環境のため、季節ごとの現況確認と生育状況の観察記録を行いながら、以下のような状況が見られたときは、生育環境に影響を及ぼさないよう管理作業を検討・実施する。

- ・人による踏み荒らし、四駆車などの侵入 → 注意喚起の看板、侵入防止柵など
- ・多年草（クズ、セイタカアワダチソウ等）の繁茂 → 除草や重機かく乱など
- ・湿地環境の乾燥化 → 全体盤高の切り下げ、水路からの流入確保など



2024/5/18 伸長



2024/11/9 結実



2025/1/5 冬季の花がら

② 駒ヶ谷地区修景池 移植地の管理（生育地Ⅱ）

移植・植付けした株の生育状況の経過観察を行い、ミゾコウジュの管理とあわせて周囲を除草する。定着の状況によって今後の管理方法を検討する。



2024/6/6 伸長



2024/11/14 結実



2024/1/16 除草

<管理スケジュール>

時期	管理内容		タコノアシの状況
	生育地Ⅰ（自然ゾーンB）	生育地Ⅱ（駒ヶ谷地区）	
4月	生育状況の確認	生育状況の確認	新芽、茎が伸長
5月		↓ (ミゾコウジュ開花)	↓
6月		選択除草	↓
7月		↓	花穂が伸びる
8月		↓	開花
9月		↓	↓
10月		生育状況の確認	結実
11月		↓	紅葉
12月	(除草・かく乱等)	上部の機会除草 OK	上部が枯れる
1月		生育状況の確認	↓
2月	↓	↓	↓
3月	↓	↓	↓

<現地のようにす（自然ゾーンB地区 ワンド湿地：生育地Ⅰ-1 2020年）>

2020/4/2

発芽？（判別できず）



2020/5/18

成長初期



2020/6/18

高さ約 30cm



2020/7/20

高さ約 1m



2020/8/27

開花



<現地のようにす（自然ゾーンB地区 ワンド湿地：生育地Ⅰ-1 2020年）>

2020/9/24

結実



2020/10/1

結実



2020/11/15

紅葉



2020/12/26

冬枯れ



2021/3/11

前年の花序



<現地のようなす（自然ゾーンB地区 二つ池：生育地Ⅰ-2 2023/5/18）>

下流側の池の水辺に、
タコノアシとカワヂシャが生育



伸長したタコノアシ

昨年の花がら

<現地のようなす（西行うたの道 低水護岸下：生育地Ⅲ 2024/12/16）>



●自生地の除草・かく乱

タコノアシ自生地のワンド湿地（生育地Ⅰ-1）では、多年草（クズ、セイタカアワダチソウ、キシショウブ等）の侵入とともに、つる植物（ゴキヅル等）や一年草（ミゾソバ等）が群生し、タコノアシが覆われて倒伏しているようすが見られた。

その状況を改善する試みとして、以下のようなかく乱作業を行っている。

- ・湿地表面を覆っているマット状の枯草の除去（かく乱）
- ・多年草（セイタカアワダチソウ、キシショウブほか）の引き抜き、小灌木の伐採
- ・タコノアシにかぶさった枯草や周囲の草の除去
- ・流れから水を引き込む水路づくり

タコノアシは、枯草に埋もれても絶えることはないと考えられるが、現地調査や観察がしやすいよう、最初の発見時のようなタコノアシが倒れていない状況を維持したいと考えており、除草・かく乱作業でどの程度の効果があるかを確かめて、今後の改善点を検討する。



2025/12/23 刈払機で全面除草



2026/1/15 湿地表面のかく乱



2026/1/15 流れから水を引き込む水路づくり



2. カワヂシャ生育地の管理

(1) 生育地の概要と管理内容

R3(2021)年度の調査では、A,B,C 地区に生育が確認されているが、一年草のカワヂシャは毎年同じ場所に生えるとは限らないため、比較的安定的に生育すると考えられる、B地区の二ツ池およびワンド湿地（タコノアシ生育地）を、当面の保全管理の対象地とする。

●管理区域

① ワンド湿地（生育地Ⅰ）

カワヂシャはタコノアシ生育地の外の流水沿いに群生している（R3/2021 調査）。

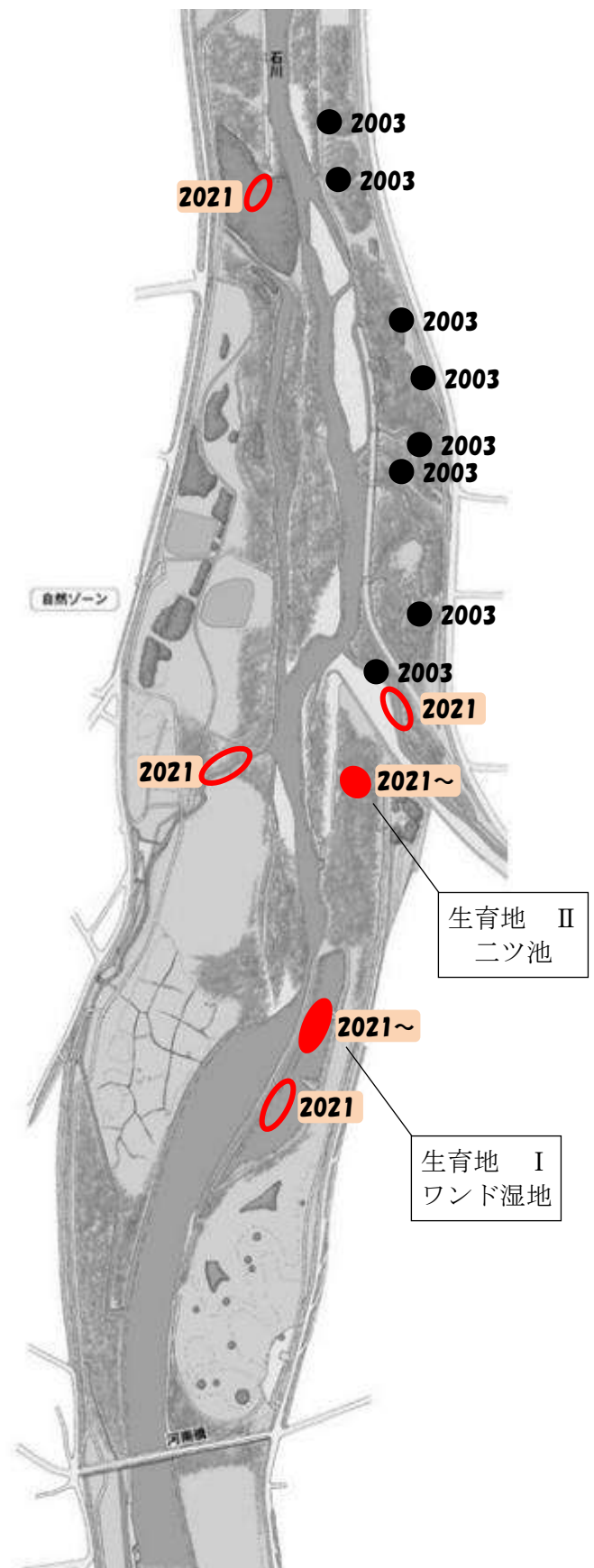
② 二ツ池（生育地Ⅱ）

下流側の小池の水辺に比較的多くの生育が見られる（R5/2023）。

いずれの生育地も流水や池の水位の変動によって、生育状況が変化すると考えられるため、当面は積極的な管理作業を行わず、季節ごとの現況確認と生育状況の観察記録を行う。

<管理スケジュール>

時期	管理内容	カワヂシャの状況
	生育地Ⅰ、Ⅱ	
4月	生育状況の確認	新芽、茎が伸長
5月	(移植)	開花・結実
6月		
7月		↓
8月		枯れる、種子散布
9月		
10月		
11月		
12月		
1月		
2月		↓
3月		発芽



●カワヂシャの移植

駒ヶ谷地区の修景池は、来園者が身近に絶滅危惧種のみずこうじゅ（自生：由来不明）やタコノアシ（2020 年移植）などを観察できるようにしており、あわせてカワヂシャの生育も目指して以下のような移植試験を開始した。

- 2023/5/18 ・群生している自生地（B 地区二ツ池：生育地Ⅱ）から、種子をつけている数株を、根を張っている泥土ごと掘り取って鉢に植え付け。
 - ・移植した鉢を乾燥させないように、また落ちた種子を受けられるように、大きな容器に腰水にして結実を待つ。
- 2023/7/ 3 ・結実後、水に落ちた種子を鉢土にもどし、流出しないようプランターに植え付けて乾燥しない水辺に設置。
- 2024/4/29 ・移植したプランターで発芽、開花を確認（3 株）。同時に開花したオオカワヂシャは除去。
- 2025/5 ・修景池での生育は確認されず（修景池の環境改善が必要と考えられる）。

カワヂシャは一年草で、毎年繰り返して発芽・結実・種子散布される必要があり、修景池の環境が生育に適しているかどうかは不明である。そのため、みずこうじゅやタコノアシとあわせて、毎年の生育状況をモニタリングし、環境改善の試行錯誤が必要になると考えられる。



自生地から採取した株 2023/5//18



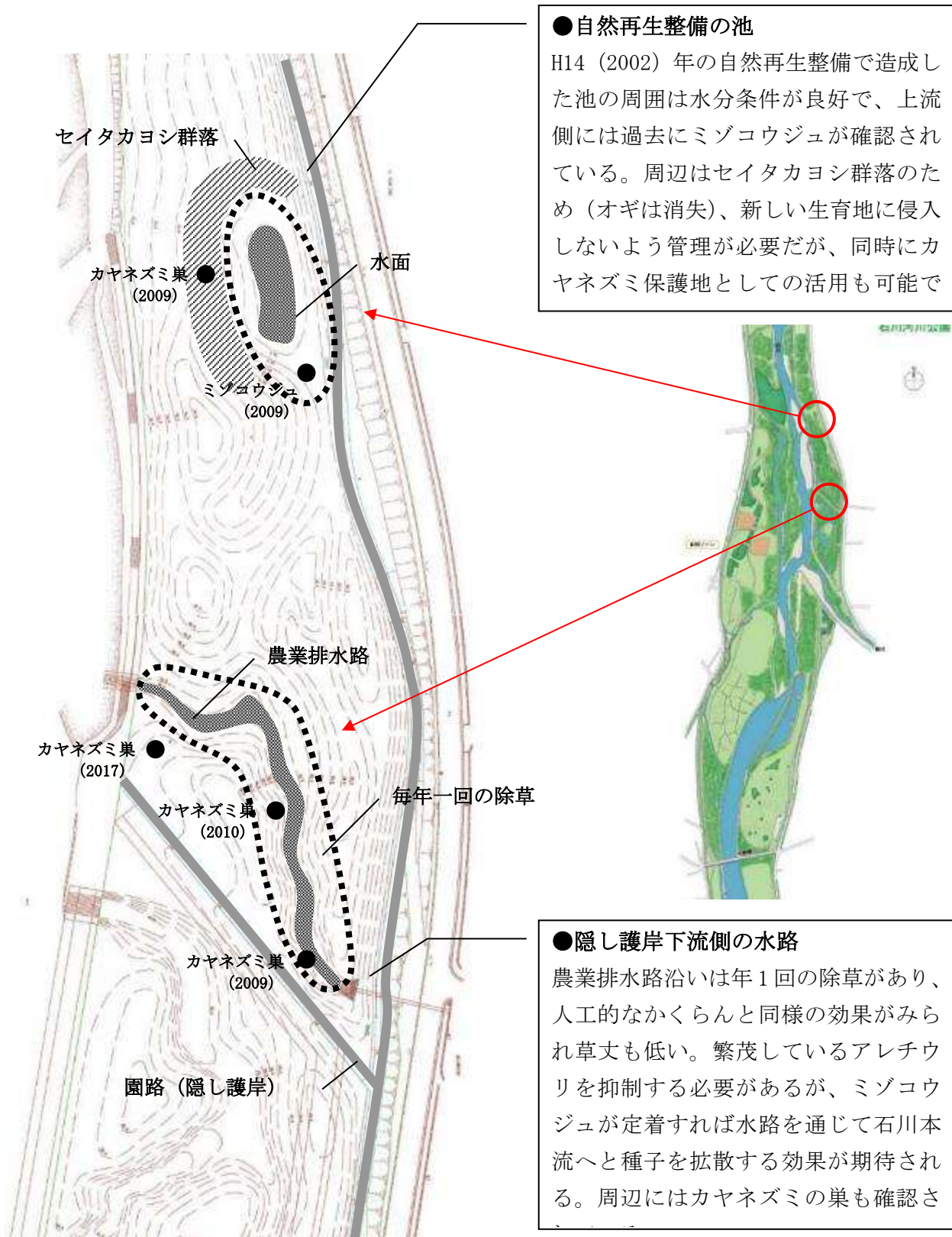
結実した株の移植 2023/7/3



翌年に発芽・開花を確認 2024/4/29

I 希少種の生息・生育地の管理

◆新しい生息・生育地づくり（候補地）



●二ツ池（通称）

河川敷に自然にできた小池（伏流水の滲出？）で、下流側の池の水辺には、カワヂシャやタコノアシが生育している。2019 年まで上流側の土手にカワセミの巣があったが、2021 年に壁が崩れて消失し

●人工ワンド

1995 年整備のワンドで、河道が左岸寄りに変化して池的環境になる（2006 年にベニトトンボの記録あり）。現在は陸化が進んで中央に水路ができてい

R1 / 2019 年、その水路沿いにタコノアシ（準絶滅危惧種）

タコノアシ
カワヂシャ自生地

現在の水路

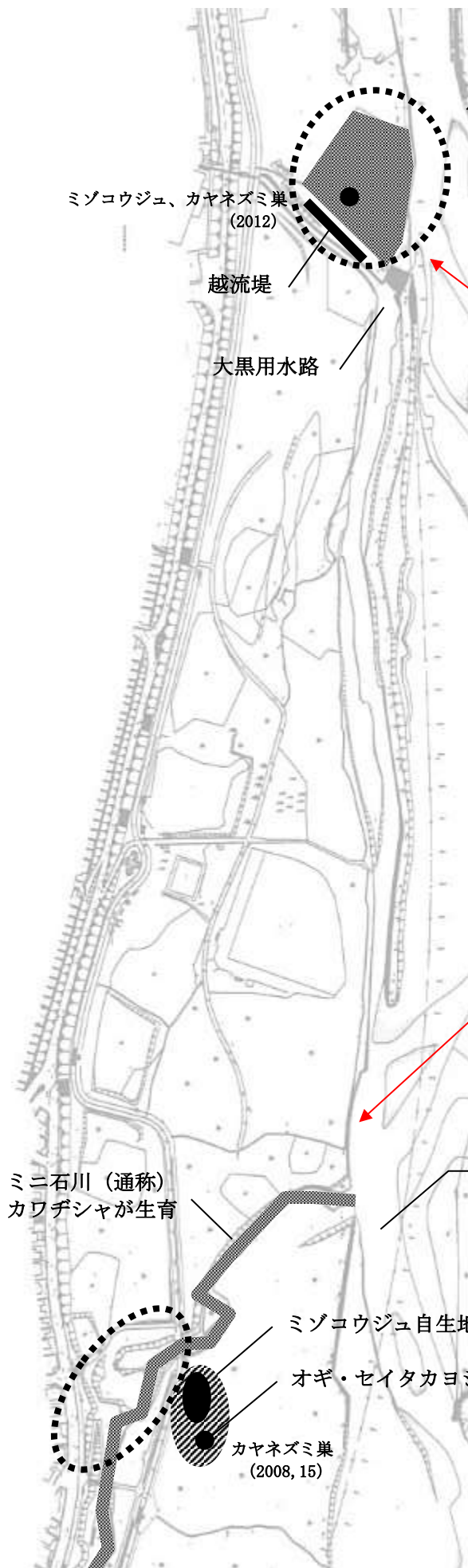
かつての水面

かつての流入

タコノアシ
カワヂシャ自生地



2018 グーグルマップより



●越流堤の下流側

H23 / 2011 年の防災工事で越流堤と下流側の切下げを行ったことで、毎年数回冠水し、工事後にはミゾコウジュの生育やカヤネズミの巣が確認されている。ミゾコウジュが定着すれば、冠水により石川本流へと種子を拡散する効果が期待される。



●ミニ石川沿い

ミゾコウジュ自生地と園路をはさんだ反対側に流れている用水路（通称ミニ石川）沿いは、親水空間として水際が切り下げられており増水時には冠水する。本流への種子供給の可能性のほか、自生地とも近く園路沿いでもあるため、来園者への PR 効果も期待できる。

◆その他の取組み

1. 神社と連携したオギ草地づくり

地域の神社で毎年7月に開催される行事「夏越の祓」で使われる「茅の輪」の材料として、2018年から公園内のオギを提供している（刈り取り作業は神社で実施）。近年は良質なオギが入手困難になっており（カヤ場の消失、周辺への配慮で早期除草、手入れ不足による劣化など）、伝統行事の途絶にもつながっているためである。一方、公園内のオギ草地も、同じ場所を毎年連続して6～7月の成長期に刈り取ると、次第に衰退していくことが考えられるため、クズ繁茂地の解消を兼ねて新規のオギ草地の創出に取り組むこととした。

なお、D地区のオギの回復・成長を待つため、2022年から当面の間はパークゴルフ場本流側および歴史の里のオギ草地を刈取って利用している。

<現 況>

- ・三つの神社が「茅の輪くぐり」に使うオギを刈取り：6月末～7月上旬 各 100 m²
（道明寺天満宮（藤井寺市）2018～、萩原神社（堺市）2019～、大津神社（羽曳野市）2021）
- ・オギ採取地以外はもとはセイタカヨシ草地だったが、現在はクズが侵入して被圧されている。
- ・オギ採取地も成長期（6～7月）の刈り取りで衰退傾向にある。

<整備・管理（自然ゾーンD地区）>

- ・クズ侵入地をオギ採取用の草地として育成 → オギ採取地の隣接地から試験実施 約 500 m²
- ・対象地のクズ根茎を除去し、園内の別のオギ草地から根茎を採取して移植を行う。
- ・その後の管理（人力での選択除草、オギ移植など）について、神社の協力を得ている。



オギ刈り取り後（2018年6月）

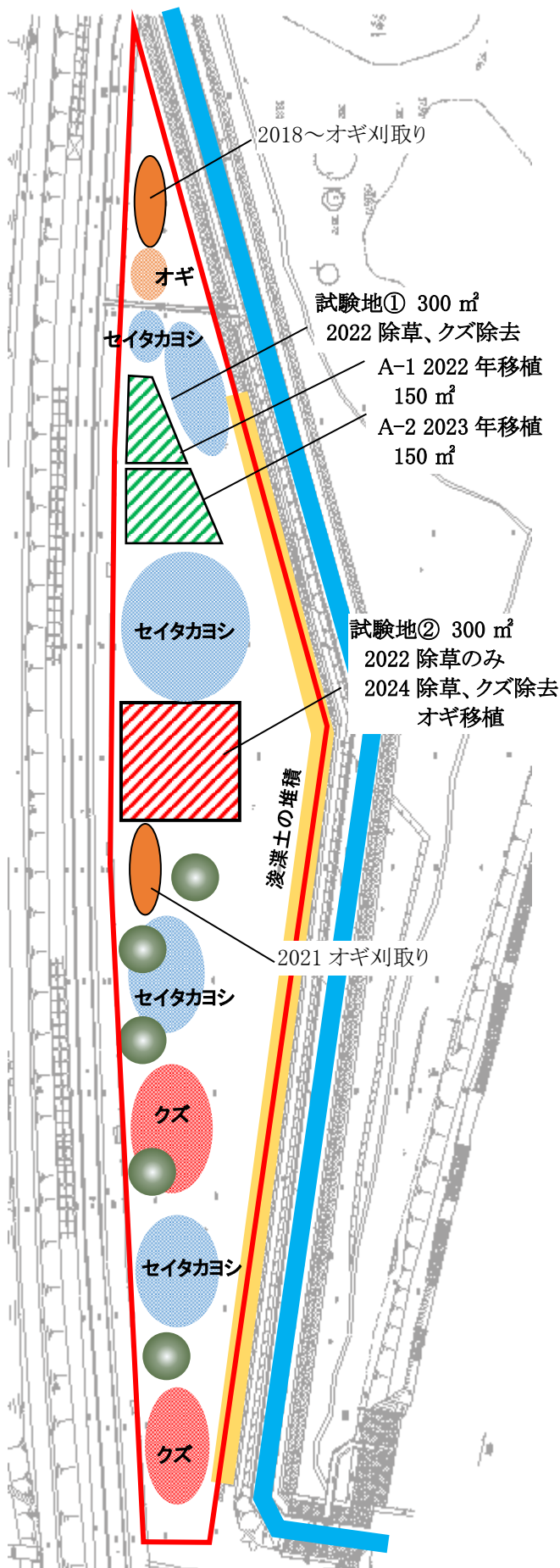


→ その後のオギ伸長（2018年10月）



オギ採取地の上流側のクズ繁茂地（セイタカヨシが混ざる）2018

< 現況および試験地の設定（自然ゾーンD地区） >



<整備のようす（自然ゾーンD地区）>

試験地①② 移植したオギの生育状況 2025/6/5



試験地② 管理作業

オギ根茎の移植後 2025/3/27



オオブタクサ抜き 2025/6/5
(石川自然クラブ)



神社による除草作業 2025/9/25



<オギ提供先の神社>

神社	道明寺八幡宮 藤井寺市	大津神社 羽曳野市	萩原神社 堺市東区	廣國神社 堺市美原区	一須賀神社 南河内郡河南町
2018 年	D 地区		D 地区		
2019 年	D 地区		D 地区		
2020 年	D 地区		D 地区		
2021 年	D 地区	D 地区	D 地区		
2022 年	パークゴルフ場西		パークゴルフ場西		
2023 年	パークゴルフ場西		パークゴルフ場西	パークゴルフ場西	芝生広場
2024 年	歴史の里		歴史の里		
2025 年	パークゴルフ場西		パークゴルフ場西		

<オギの刈り取り（パークゴルフ場西） 2025/6/24>



<茅の輪づくり（道明寺八幡宮） 2024/6/24>



廣國神社

◆その他の取組み

2. 自動撮影カメラの設置

駒ヶ谷地区でキツネが目撃されていることから（2021 年 11 月死体確認）、大阪府生物多様性センターの協力で自動撮影カメラを設置して調査を行った。当初（2022 年 6 月）はキツネの巣穴と思われる箇所（古市スポーツ広場の溝内）に設置したが撮影されなかった。巣穴に近く警戒された可能性があるため別の場所に移動することとし、自然ゾーン A 地区のフェンスに設置した（2022 年 9 月）。以降、キツネのほか、タヌキ、ノウサギ、ハクビシン、イタチ、アライグマ、ヌートリア、キジ、アオサギなどが撮影されている。

2022/6/13 古市スポーツ広場に設置（石川本流側の溝内）



キツネの巣穴
（入口に鳥の羽根が散らばる）

2022/9/7～ 自然ゾーン A 地区のフェンスに設置（カヤネズミ保護草地の本流側）



キツネ 2026/2/18



タヌキ 2頭 2026/2/19



ノウサギ 2026/1/22



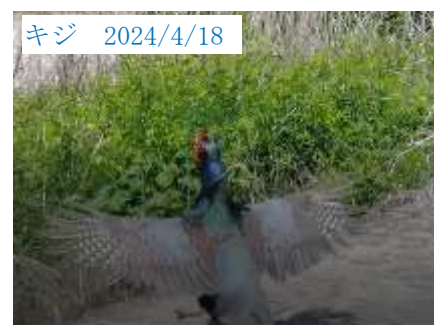
アライグマ 2026/4/2



ハクビシン : 2022/10/21



ヌートリア 2024/11/18



キジ 2024/4/18

◆その他の取組み

3. 石川の植物見本園の整備（駒ヶ谷地区 修景池）

修景池の一面を石川の植物を観察できる見本園となるよう、既存のミゾコウジュやタコノアシに加えて、その他の希少種や、河川敷で見られる花の咲く植物などを移植・育成する。また、池の水質を改善してカワバタモロコなどの導入を試みる。

<導入する植物（案）>

春：アマナ、アリアケスミレ、シロバナタンポポ

初夏：カワヂシャ、ミゾコウジュ、ネジバナ、チガヤ、ホタルブクロ、ハナショウブ

夏：ホソバオグルマ、タコノアシ、ヤブカンゾウ、ガマ

秋：カワラナデシコ、ツルボ、オギ、エノコログサ

<整備内容>

2020年 タコノアシの移植（定着）

2023年 カワヂシャの移植（翌年開花→その後消滅→2025バックヤードで育成中）

2025年 石敷き園路の整備、アマナ等6種を移植

駒ヶ谷地区修景池 整備イメージ

